

平成29年度第1回栃木県総合教育会議

議事録

日 時 平成29年9月5日（火曜日）
午後3時00分から午後4時20分まで

会 場 栃木県公館中会議室

出席者	教育長	宇田 貞夫
	教育委員（教育長職務代行者）	伏木 由佳子
	教育委員	工藤 敬子
	教育委員	陣内 雄次（欠席）
	教育委員	岡 直樹
	教育委員	吉澤 慎太郎
	知事	福田 富一

1. 開会

○司会 定刻となりましたので、これより平成29年度第1回栃木県総合教育会議を開会いたします。

当会議は、栃木県総合教育会議設置要綱第5条に基づき公開で行うことになっておりますので、ご了承願います。

2. 挨拶

○司会 初めに、福田富一知事よりご挨拶いたします。

○福田知事 皆さん、こんにちは。

ご多忙の中、教育委員の皆様方には栃木県総合教育会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。また、本県の教育施策の推進のために大変なご尽力をいただいております。改めて感謝を申し上げます。

昨年度の総合教育会議では、教育大綱に位置づけた施策の方向性について、2回にわたりまして皆様方から貴重なご意見を頂戴しました。教育委員の皆さんと私が栃木県の教育行政の向かうべき方向について認識を共有した上で課題解決に取り組んでいきたいと考えておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

この総合教育会議は、教育を行うための諸条件の整備など、重点的に講ずべき施策について協議、調整を行うほか、児童生徒の身体に被害が生じた場合等の緊急に講ずべき措置について協議をする役割を持っております。

今年3月27日に発生しました雪崩事故につきましては、この会議の場で協議すべきところではありますが、ご承知のとおり検証委員会におきまして6月末に第1次報告書がまとめられました。現在、9月中の最終報告書案の取りまとめに向けて作業が進められ、最終報告書は10月に提出される見込みと聞いておりますことから、この最終報告書を踏まえた上で第2回目の会議を開催し、登山に限らず、広く運動部活動の安全管理と今後のあり方について教育委員の皆さん方と意見を交換したいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

本日の会議では、教育大綱の進捗状況を踏まえ、学力と体力の向上を中心に皆様方と率直な意見交換ができればと考えておりますので、よろしくお願いを申し上げまして、開会に当たっての挨拶といたします。

3. 議題

教育大綱を踏まえた取組について（学力と体力の向上を中心に）

○司会 それでは、これより議事に入ります。

ここからの議事の進行は、本会議の招集者であります福田知事をお願いいたします。

○福田知事 それでは、議事を進めて参ります。

本日のテーマは、「学力と体力の向上について」でございます。このテーマは、栃木県教育大綱の基本目標1「知・徳・体の調和のとれた発達を促すことによって生涯にわたって学び続ける力を育みます」の実現に向けて定めた施策の方向1「確かな学力の育成と教育環境の整備」、施策の方向2「豊かな心と健やかな体の育成」にも掲げましたとおり、非常に重要なテーマであり、かつ教育においても最も基本的な事項だと考えて

おります。

平成28年度の第1回会議でも学力向上と生活習慣の定着について議論いたしました。先日、平成29年度の全国学力・学習状況調査の結果が出たことを踏まえ、本日は学力と体力の向上について議論して参りたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。まずは、学力について、事務局から説明を求めます。

○事務局 学校教育課から、とちぎの子どもたちの学力について説明いたします。

それでは、資料1をご覧ください。資料1の1番でございますが、「栃木県教育振興基本計画2020」の推進指標に見る学力について、ご説明申し上げます。

上の表をご覧ください。8月28日に公表されました平成29年度全国学力・学習状況調査の結果では、全国と比較いたしますと、小学校・国語Aで0.1%、小学校6年の算数Aで0.1%、中学校3年生の国語Bで0.4%と、8教科中3教科は全国を上回りました。また、8教科中、小学校6年の算数Bを除く7教科は全国との差がプラスマイナス0.5ポイント以内におさまり、全国とほぼ同程度で、中位に位置していることがわかります。

中ほどにあります各教科のグラフをご覧ください。こちらは、過去3年間における全国と県の平均正答率の差を示しております。8教科中、中学校3年の国語Aを除く7教科は改善が見られるなど、ほとんどの教科で全国値に近づいていることがわかります。

その要因といたしましては、平成26年度から実施しております、とちぎっ子学力アッププロジェクトを通して各学校で調査結果を活用した検証改善サイクルの構築、運用が図られつつあることが考えられます。

続いて、裏面、2ページをご覧ください。2番の平成29年度の主な取組について説明いたします。

まず、とちぎっ子学力アッププロジェクトに係る新規事業について説明いたします。星印が平成29年度の新規事業になっておりますが、1つ目の星印をご覧ください。とちぎっ子学力向上応援団派遣事業でございますが、こちらは学習指導について豊富な知識と経験を有する学力向上専門員を学習指導の課題解決に向けて意欲的に取り組む学校に派遣いたしまして、市町教育委員会と連携しながら、学校の課題解決に向けた取組を支援しております。177校を派遣校に指定いたしまして、学力向上専門員を同一学校に原則2年間派遣いたします。

2つ目の星印をご覧ください。学力向上推進リーダー配置事業についてですが、小学校の国語と算数の教科指導に実績のある教員を学力向上推進リーダーに認定いたしまして、複数の小学校を兼務しながら、配置校における教員への助言等を行いまして、教員の指導力向上を図っております。平成29年度は14市町に配置、合計50校に勤務しております。配置校の学校長からは、経験年数に応じた適切な助言を得ることができる、あるいは推進リーダーを中心に放課後、教員が自主研修会を開催して指導方法を学んでいるといった話を伺っております。

ご案内のとおり、次期学習指導要領では、社会に開かれた教育課程という理念や育成を目指す資質・能力等も踏まえて、主体的、対話的で深い学びの視点から授業改善に取り組むことが必要であるとされております。各学校が次期学習指導要領の理念を十分に踏まえまして、身に付けるべき力を明確にし、その定着状況を把握しながら、学校全体で学力向上に取り組むことができるように、きめ細かに学校を支援していきたいと考え

ております。今後も学校、市町教育委員会と連携を密にし、本プロジェクトを着実に推進しまして、本県児童生徒一人ひとりの学力向上にしっかりと取り組んで参ります。

以上、説明申し上げます。

○福田知事 では、議論を進めて参ります。

概ね20位から30位あたりの位置にあるということで、現場の先生方や教育委員会の皆さんの努力で中位程度まで持ってこられたということは評価していいのではないかと思います。この調査は4月中旬実施ですので、今年度の結果については平成26年度から学力アッププロジェクトに取り組んできた成果のあらわれではないかと思いますが、詳細は分析の結果を待ちたいと思います。

昨年度も先進地との違いなどについて議論しましたが、その後、教育委員の皆さんで秋田県に視察へ行ってくださったと聞いております。そこで、今回の結果についての感想あるいは意見など、また視察時に参考になったことも踏まえて、さらにその他の先進地の情報などもお持ちでしたらお話を聞きたいと思います。その上で、知識・技能だけでなく、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力など、確かな学力を子どもたちが身に付けるためには今後何をしていくべきか、皆さんのご意見を順次頂戴したいと思います。

では、どなたか口火を切ってもらえませんか。岡委員。

○岡委員 このたびの全国学力・学習状況調査ですが、結果が昨年より良かったということは喜ばしいと私自身も思っています。ですが、この調査だけをもって学力を測るのであれば、例えば過去問を反復することで、ある程度即効性があるんじゃないかと思うんです。ただ、それが本当にいいことなのか。学力とは何かと考えたときに、将来、未来の人生、仕事、家庭というような自分の未来を切り開いていく力の基礎となるものと考えます。そう考えた場合に、未来を見据えた栃木の取組というものが必要になってくる。少しは時間がかかるかもしれませんが、そんな取組を通して全国的に見ても上位を目指していけないかと思います。必ずしも即効性はないのかもしれませんが、そういう取組というのが重要であると思っています。

栃木県教育大綱の中で、基本目標、確かな学力の育成と教育環境の整備、主な取組としての主体的・協働的に学ぶ学習の推進、アクティブラーニング、これととちぎっ子学力アッププロジェクトの推進。このとちぎっ子学力アッププロジェクトの推進というのが近い将来どう形になっていくのか。それから、アクティブラーニングはどんどん推進していくという話があります。また、説明にありました学力向上推進リーダーの配置ですが、これも主な取組にありますけれども、秋田県に視察に行った際、秋田県の教育委員会から、秋田県では教育専門監を配置することによって、学校内においてもいい成果が見られているということでありました。本県としても、力を入れていくべきであろうと思っています。

それと、全国学力・学習状況調査と同一の「とちぎっ子学習状況調査」は県が独自にやっているものですが、その際フォローアップシートというものを作成いたしまして、本人と保護者にフィードバックしていきます。ここができないですよ、ここが悪いんですよというところを本人と保護者に戻していく。これも少しは時間がかかるかもしれませんが、効果が期待できるのかなと。

今日は、平成29年度の全国学力・学習状況調査の報告書というのを午前中の教育委員会定例会でいただきました。この中で、その結果を教員がどのように使っているか。それを児童・生徒指導にどのように生かしているのか。数字的には多くの教員が使っているようですが、十分に有効活用しているとはまだ言えないような結果になります。ですから、これをもっともっと浸透させて、各学校で各教員たちがこのフォローアップシートを有効活用する、そのことが次の取組や学力アップに向けても重要性を持つのではないかなと思っています。

それと、学力の個人差があると思うんですね。子どもというのは興味があるものには積極的に取り組むという傾向があると思っていますので、やらされているというところから、やりたい、学びたいというところに転換させていく、その取組というのが必要なんだと。その中で、将来どうなりたいのかというキャリア教育というものも重要視すべきであろうと思っています。

それと、栃木県教育大綱の中で基本目標の中の、子ども一人ひとりに応じた教育・支援の充実という項目がありますけれども、この資料に関しては、障がいとか虐待とか、そういう子どもたち一人ひとりに対応していないというところを捉えているんですね。先ほど申しましたように、学力の伸びというのに個人差があるとすれば、一人ひとりに対応した教育を全ての子どもたちという意識の中でやっていくことも重要だと思います。そのときに、先ほど申し上げたフォローアップシートが重要性を持つてくるのではないかなと思っていますし、それを活用していく中で今ネックになっているのはやはり教員の多忙だと思うんです。事務や部活動に時間を割かれて、大分遅くまで学校にいる先生も多数います。明日の授業の準備も急いでやっている。十分な案ができていいのかと考えますと、やはり学力を上げていくという中で、教員多忙化の解消、教員の労働状況の改善というのはやはり必要不可欠と思っています。時間ができて余裕がある教師が子ども一人ひとりに今よりも深く向かい合う、それが学力向上の一助になると考えています。以上です。

○福田知事 ありがとうございます。では、伏木委員、その後、吉澤委員、工藤委員、教育長の順番でお願いします。

○伏木委員 学力テストの結果が改善されてとても良かったと思うのと同時に、栃木県の子どもたちは、「一貫して学ぶことを楽しいと感じますか」という項目について比較的肯定的に捉えている子がすごく多くて、そういうデータを拝見すると、成績、点数だけではなくて意欲を持ち続けているということがすごく良いことなので、このまま継続していただきたいと思いますし、現場の先生の御努力が実っているのではないかと感じております。

事務局の説明にもありましたが、とちぎっ子学力向上の施策ですとか学力向上推進リーダーの自主的な研修会も行われているということでしたので、先生方も新しい学びだということをしごく意識して研修されていることと思います。新しい学力といいましても、私が気を付けてほしいと思うのは、新しい学力というよりも、そこにもともとあった、日本の昔からの、今までの日本の教育というのも決して間違っていなかったし、10代のころまでに暗記、つまり覚えなくてはいけないものというのは必ずあるわけですから、専門の職業に就くための大学に進学したとしたら、例えば医学部などは95%は与え

られたものを覚えないと、その先の創造的な仕事はできないわけですから、今までの教育を引き続き怠ることなく続けてほしいというのが私の希望です。以上です。

○福田知事 ありがとうございます。では、吉澤委員。

○吉澤委員 8科目中7科目が向上したということは素直に喜ぶべきだろうと思います。そして、この結果は各現場での先生方の努力が実ってきた成果だろうと思います。先ほどの説明の中で、学力向上専門員というのがありました。これは、前は学力向上アドバイザーだったわけですが、こういうアドバイザーから専門員への流れ、これも相当な力となって結果に結びついたのではないかと思います。

昨年、教育長同士の結びつきから秋田県に学びに行くというチャンスが生まれたわけであり、教育長が学校教育課長や学力向上推進室長など学力向上に関係ある3人を伴って秋田へ行ったことが非常に良かったと思っております。オフィシャルな説明会もありましたし、夜さまざま情報交換をする中で、さっき岡委員から話がありました教育専門監の話が出てきたわけであり、何校かを受け持つ非常にベテランの先生がいて、その人が模範授業をやったり、いろいろ教え方を指導したり。この春に「学力向上推進リーダー」がスタートしましたが、具体化の速さは本当に素晴らしいと思っております。いずれ効果が発揮されていくのかと思っております。

いろいろな形でこの学力向上をやっていくときに、平均を上げていくことが中心でなされると思うのですが、できる子をもっと伸びるような、できる子にもっと難しい課題を与えてさらに伸ばすということもぜひやってもらいたいと思っております。

あと、1都9県教育委員会教育委員協議会の協議事項で、栃木県の「未来創造大学」や「じぶん未来学」について他県の方々は非常に興味を示しています。最近私がこれはすごいと思っておりますのが、「とちぎ英語教育推進中核教員研修」であります。高校、中学、小学校の先生が一堂に会し、1年間にわたって英語の研修をしているプログラムであります。その中には高校生、中学生、小学生が加わる部分もあります。県教育委員会と市町教育委員会をまたいだ事業であり、平成26年から行われて既に4年間やられております。これは1都9県教育委員会教育委員協議会で話しても、他では全然やっていないようなことで、これは栃木の誇るべき教育システムだと思います。

ただ、気になっておりますのが、国からの補助金は5年間の事業で、平成30年までだと聞いています。ですから、国の補助がなくなっても、県の独自の事業として平成31年以降も続けてもらえたらよろしいと思っております。

現在は国語と算数、数学について、小学生、中学生の学力を判定するということをやっておりますけれども、いずれは英語も加わってくる可能性があるんじゃないか。そういうときに、栃木でやってきている先生方の研修の結果が花開いてくるんじゃないかという感じがします。

先ほど知事の話で、20番、30番ぐらいまで来ているということですが、常態的に5位以内と言いたいところですが、10位以内に栃木県があるような、そんな目標が持てると良いと思っております。

以上でございます。

○福田知事 ありがとうございます。昨年、秋田に視察に行って、学力向上アドバイザーを専門員にしたということですね。

- 吉澤委員 そうですね。これが早速具体化したスピード感と実行力に感心した訳であります。
- 福田知事 教育長、この学力向上推進リーダーは効果を上げたんですか。
- 宇田教育長 今回は試験が4月でしたので、来年は効果が検証できるのではと思います。
- 福田知事 それから、できる子どもはもっと伸ばしてやれば良いという話が出ました。いわゆる習熟度別学習指導ですけれども、県ではどうなっているんですか。
- 宇田教育長 小中学校は習熟度で分けていることはあまりないでしょうか。池田次長。
- 池田次長 複数の教員が1つの学級でグループ分けし、あるいは、習熟度に応じて教室を分けながら、その教科の時間帯でやっていると聞いています。
- 福田知事 全市町で。
- 池田次長 ほとんど全ての市町で実施していると思います。
- 福田知事 宇都宮市を中心にやっていますね、随分前から。
- 池田次長 加配教員を活用してそういう指導も工夫を行っています。
- 福田知事 やろうとすると、できる人ばかりという、えこひいきとか不公平だとかの意見が出て、ためらったり、やらない自治体も当然出てくるんです。しかし、できる人を伸ばしてやらなかったら、いつまでたってもみんな一緒に運動会でテープを切るみたいな話をしてたんじゃないので、できる人は相当前に進ませてやると。飛び級のようなものは日本にはないんでしょうか。
- 宇田教育長 高校から大学は、千葉大などいくつかの大学で、高校2年生が大学受験をするというのがあります。
- 福田知事 高校2年から千葉大に行けるんですね。
- 宇田教育長 入っています。
- 福田知事 そうですか。栃木県の高校生が、高校3年生に入ったということがあったっていいと思う。そういうのを目指していくべきだと思います。
- それから、市町教育委員会の問題、習熟度別学習、先ほどの縦串の研修ですね。
- 吉澤委員 とちぎ英語教育推進中核教員研修は素晴らしい研修だと思うんです。
- 福田知事 飛び級で大学に行かせてやれといっても、小中高の学習が実を結んで初めて飛び級が可能となるわけですからね。高校1年生、2年生だけで一生懸命頑張っても、難しいと思いますので、学習塾に行くわけですね。そういうことを考えますと、吉澤委員のおっしゃった、できる子はさらに伸ばしてやると。底上げをするのは当然です。その上で、そういう教育も栃木にも必要だと思います。工藤委員。
- 工藤委員 まず今回の小学校と中学校の学力という観点から発言をさせていただきますが、今回、昨年度より結果が改善されているということで、悪くなるよりは上がったほうがいいわけで、皆さんの努力が実ってきていることを感じております。
- 今、お手元の資料の中にはないんですけれども、問題、設問の基礎的な部分の計算問題、あるいは漢字の書き取りであったり、そのほかの真ん中の問題と最終的に思考・判断・表現という問題、応用の部分ですけれども、そういった部分の点数が低いというデータが出ております。1つの答えを見つけていくということに関しては、今の子どもたちは非常に優れているんですが、文章を読み取って考えたり判断したり表現したりということが非常に弱い。ですから、ここの部分が底上げされていくことによって、またテ

ストの結果がさらに改善されていくという余地はあるのではないかと分析をいたしました。

今は先生が教えて、それを子どもたちがノートをとったりという受け身的な学びであって、どちらかというところを共有している学びが多いんですが、こういった思考・判断・表現という能力というのは、今後アクティブラーニングが充実されていくのではないかと思います。ともに同じ問題に対して1つの答えを出すのではなくて、いろいろな意見をたたかわせながら、さまざまな考え方に触れながら自分なりの考えを深めていたり判断材料にしていたり、あるいは自分の言葉で表現するという能力が高まっていくのかなど。そのあたりの部分の充実を今後図っていく必要があるのではないかと思います。

それから、今の小学校、中学校の子どもたちの学びに触れる機会があるんですけども、そこで勉強が苦手というお子さんたちをつぶさに見ていきますと、何ができていなくてできないのかというと、実は勉強の仕方がわからない。どうやって解いていいのか、わからない。暗記しなさいと言われても、どうやってやったら良いのかわからないというお子さん方が非常に多いんです。教育委員会定例会で拝見させていただいたデータの中に、「わからないことは自分でなるべく解決しようとする」と回答しているお子さんが8割を超えているんです。ですから、コツを教えてあげたり、勉強の方法を教えるというような、ティーチングよりもコーチングの部分を先生方に充実していただくことによって、子どもたちができないというのはその子の能力ではなくて、やはり伝え方であったり学び方を知らないということが根っこになっていることもあるので、このあたりをどのように子どもたちに伝えていくかということが、大きな課題、今後の改善の部分になると思います。

ここまでが従来の学力と言われている課題に対する私の考えですが、2020年から学習指導要領が変わって大学入試制度が変わっていくということで、基礎知識はもちろん大切だけれども、そこからさまざまな教科を横断的に考えて、トータル的に考えていくという知識の習得から知識の活用へということを重視させていかなければならないということで、高校教育でこのあたりをどのように充実させていくかが今後のとちぎの子どもたちの学力を伸ばしていく大きな鍵になると思います。

京都の堀川高校では探究科という新しい科を創設したことによって、自分が疑問に思うことであったり自分の関心のあることであったりということを深めていく中で、学びの楽しさを知り、学力がそれに伴って向上していくという成功事例があります。

自分が何に興味があって何をおもしろいと感じるのかという部分を高校時代に体験することができれば、大学でどの学部に行っていくのか、何を学んだらいいのか、自分は将来何になったらいいのかということに迷う高校生が大分少なくなって、これからは一生涯学び続けることが大切になるので、学びは楽しいんだということを高校の時代に根拠として培っていくことは非常に良いことだと思っております。

最後に、教育の問題というのは地方創生と切り離せない非常に大きなテーマであると思っております。今後、知事はこの地方創生と教育をどう絡めて、個性のある教育を打ち出していくのか。教育というのはこれから人を呼び寄せていくために大きなPR材料になっていくと思っております。前々回の総合教育会議でもお話ししましたが、秋田は

A I U、国際教養大学というのを公立でつくって、もう13年になりますけれども、非常に高いレベルの教育を提供しており、また、会津大学が今非常に注目されているんですが、24年前に知事の肝入りでつくられた大学ですけれども、24～25年前にICTとベンチャーと国際性という3つの柱で、とんがった教育をするんだということで大学をつくって、今ここの卒業生は本当にIT関連の大企業で、すごく有名な大学の卒業生たちと肩を並べて活躍していますので、ぜひとも教育特区をつくるとか、何か個性のある教育ということを打ち出して、これから子どもを産もうと思っている若い人たちを呼び寄せるところの起爆剤になれば良いと思っております。以上です。

○福田知事 学力・学習状況調査の活用方法ですよね。知識の問題と活用に関する問題。その活用のレベルをもっと上げていく必要があるというお話。これは家庭でやるんですか、学校で担うものですか、両方なんですか、どうしたらいいでしょうね。

○工藤委員 どちらもですが、家庭の教育力がなかなか上がっていかない現状を考えますと、やっぱり多様な意見も取り込んでいって、いろんな考えがあるということを知ることにおいては学校でできることが一番いいとは思いますが。

○福田知事 それはやっぱり先生の質というところにいきますよね。能力、質。

については活用する、それからティーチングじゃなくてコーチング、高校教育が重要だというお話がありました。県として、個性ある教育方針という旗を掲げていく。国際化という分野で、秋田みたいに大学を県立で持つことは今さら不可能だと考えていますので、宇都宮大学を中心として国際教育、留学生と国の「トビタテ！留学JAPAN」と栃木県の仕組みと両方で長期・短期で海外に送り出すことを、一昨年からはじめました。一昨年の人たちが帰ってきて、去年報告会をやって、今年また2期生の人々が報告会をやってくれる。3期の人は今募集中か、もしくは募集したかという段階になっております。それ以外にもものづくり県として何が必要かということについては議論していく必要があると、今お聞きして思いました。

では、教育長にお願いします。

○宇田教育長 その前に、今日、大学の会議があるということで欠席の陣内委員からの所見を預かっておりますので、それをご紹介します。

陣内委員も、学力については4点ほど挙げております。まず、改善が見られたのは頑張りを実を結んでいるということで大変嬉しいということで、1点目はいろんな事業をやっているけれど、改善に向けて分析をしっかりとすることが重要だということ。

2点目ですが、他県に見られる参考となる事例ということで、隠岐島前高校の話です。ここは地域密着型の学習プログラムを徹底することによって生徒のやる気を引き出していく。募集する子は高校生ですが、中学生もたくさん来るようになったということがありますが、栃木県でもそういうプログラムを用意することによってモデル校を指定し、成果を検証していくのはどうだろうかという御提案でございます。

3点目ですが、学校外からの支援が学力向上には圧倒的に重要。ただ、学校外から支援をもらうためには、学校と学校外の間立つコーディネーターが必要であるけれども、それは難問だというのは前提として、先生方がコーディネーター役を兼ねて多くの時間と労力を費やすようになっては本末転倒なので、仕組みをよく考えた上で学校外からの支援を受けるのも手かなということでございます。

4点目ですが、次期学習指導要領で育成を目指す資質・能力ということで、先生方が自信を持ってアクティブラーニングを取り入れた事業展開ができるように、充実した研修、それから学習会を設置、設定してほしい。その研修や学習会を学校内ではなくて、学校教育ではない実践例、例えば環境教育、それから陣内先生が専門のまちづくり教育等、学校教育ではない実践例にヒントがあるのではということ、研修を含めてやってほしいというのが4点目です。ご紹介いたします。

それでは、私からですけれども、学力につきましては今回改善されたということで、今、知事が話されたように通過点であるという捉え方でございます。学力というものを考えたときに、先ほど工藤委員がおっしゃいました読み取る力ということでは、7月に京都で全国都道府県教育委員会連合会という会合がありまして、伏木委員と参加して参りました。そこで国立情報学研究所教授の新井紀子さん、この方は人工知能開発プロジェクト、ロボットは東大に入れるかというテーマでずっと研究を続けてきた方で、人工知能のプロフェッショナルということです。その講演会は題名が「2030年代に向けた社会変革と其中で人間に求められること」という題名でした。2030年代、人間がきちんと仕事をしている、仕事をして幸福に暮らしている、そのためには何が求められるかという視点だったと思います。

その研究成果の発表で、現段階の人工知能AIは意味を深く理解しなくてはならない問題、意味を考えなくてはならない問題が苦手、論理的に問題を解こうとしたときには限界があるということがわかったという話でございました。人間は意味がわかるという世界ですけれども、AIは基本的には膨大なデータ処理によって解答に至るのが統計上の処理の問題という捉え方をされておりました。現段階では東ロボくんは東大には入れないという結論を得て、研究はもうストップしていますが、そういう話の中で、その東ロボくんには問題の意味を理解すること、つまり読解力に限界があるということがわかったわけです。よく分析してみると、東ロボくんもそういう限界があるにもかかわらず、実際に調査をしましたところ、8割の高校生が東ロボくんには勝てないというような結果が出たそうです。人間の子どものほうが文章を読み取る力がないのではないかという仮説を立て、2万人の中学生、高校生に1,000問以上の問題を出して調査したところ、やはり人間の子どものほうが文章を読み取っていないということが立証されたということです。

その結果、新井さんは、中学校卒業までに中学校の教科書を読む力を身に付けることが教育の最重要課題であると結論づけ、これをいろいろな場で話されているようです。読解力の欠如というのは学習力の欠如とイコールになるわけですから、そういうことを強調しておりました。

今回の全国学力・学習状況調査につきましては改善が図られたところですが、今後の分析によりますが、現実には子どもたちが問題文を正しく読み取ることができずに不正解になったり、あるいは問題を解く力がないわけではないのに活用の問題であるB問題で問題の意味を正確に捉えることができないで正解できなかった子どもたちが結構いるんじゃないかと思っています。

このこともありますので、今後、日々の学習指導の中で子どもたちがしっかりと教科書の文章を読み取っているか、その点にもう一度十分に注意を払わなければならないと

考えているところです。

現在、さまざまな取組をしていますけれども、読解力というのは学力の基盤そのものだと思いますので、そのことを確認した上で今後に生かしていきたいと思っていますところ
です。以上です。

○福田知事 読み取る力、教科書、中学校卒業までそれができていなければその先に行ってもなかなか能力を発揮しにくいということですね。

○宇田教育長 図式で先生が示していたのもあるんですけど、教科書が読めない、読み取れないということは、次の段階では予習も復習もできない。自分一人では勉強できない。塾に行かなければならない。その先もずっと自分一人ではできないのでずっと塾に通わなければならぬけれど、大学に行ったら大学には塾はない。したがって、勉強の仕方がわからない。AIに職を奪われるという図式を示しておりました。

○福田知事 工藤委員のおっしゃった勉強の仕方がわからない、暗記の仕方がわからない、そういうことにつながっているわけですね。読み取る力ですね。原点もそこだと。

全員の方からご意見をいただきました。先日、栃木に移住した人たちとのフォーラムを栃木市でやりました。そこで秋田県から来た人だったと思いますが、全国学力・学習状況調査では栃木よりも上の秋田県では、やっぱり過去問を一生懸命やらせたと。うちの子どもは85点か90点か、そのぐらいとっていたのに栃木に来たら、学校がのんびりしているので、そんなに勉強も教えないし、75点に下がっちゃったと。やっぱりそういうのってまずいよねと、実際にここに子どもと一緒に移住した人の親がそういう指摘をされました。それだけ栃木県は教育現場がのんびりしているんじゃないですかという結論づけですね。ですから、過去問をやれば成績が上がると岡委員がおっしゃったと思いますけれども、子どもにとっては過去問かどうかでわからないですよ。1つのことを教えてもらって、答えの出し方がわかれば、学ぶことが楽しくなっていくと思いますので、過去問であろうがなかろうが、解答を出す、正解、丸がもらえるという、そういう反復が重要で、結果として学習に興味を持っていくということにつながるとと思いますので、情熱を持って教室で教えるということが結果としてはそこにつながっていくんじゃないかと思いました。

それから、大学コンソーシアムでグローバル人材の育成を実施することで7～8年構想から実現まで今日までかかっていますけれども、私が知事に就任したころは高校生の海外留学がピーク時の半分以上、3分の1近くに減ってしまった。これを何とかしなくちゃならない。それから大学生と意見交換会を県内でやって、留学したいか、あるいは企業に勤めて海外勤務と言われたときに行きたいかと聞いてみたら、行きたいという人は全体の1割5分か2割しかいませんでした。2つの大学で聞いたことがありますけれども。今はちょっと変わってきていますけれども、3年前ぐらいか4年前はそのぐらいのものですよね。ですから、誰も海外なんか行きたくない、留学もしたくないれば仕事でも行きたくないと。大学生ですけれども。それを何とかしなくちゃならないということで、大学コンソーシアムで宇都宮大学が中心になって大学交換をしてもらって、一定のカリキュラムを学んだ人については短期・長期両方に行けるような仕組みをつくって、全体で30人ぐらい、県の制度と国の制度と両方使っていると思っていますけれども、これを何とか拡大していきたい。これは大学生ですが、高校生は教育委員会がつくって

いる制度で少しずつ今増えている気がしています。増えているでしょう。（「はい」の声あり）最近、1年間フランスに行くという宇都宮商業高校の女子生徒、ロータリークラブの交換留学生ですけれども、よく決断したねと褒めたんです。そういう人がどんどん出て、卒業が1年遅れたとしても、それ以上の価値があると思いますので、グローバル人材の育成を一つの目標に掲げながら、秋田の国際教養大学には及ばないにしても、それに近づくことを考えていきたいと思っています。

それから、今年はいよいよ初めての技能五輪、障害者の技能大会、アビリンピックが開催されます。選手団は23歳以下で140人弱。それからアビリンピックは25人ぐらい。その中で高等特別支援学校の生徒が5人ほどいたと思いますけれども、レストランサービスとかビルメンテナンスか、クリーニング、和食、洋食などいろんな分野がある。高等特別支援学校の生徒も全国大会に出ます。日本一を決める大会です。障害があろうがなかろうが、技術を身に付けて自立していく、社会参加できるんだということを目指していきたいと思っています。また、ものづくり栃木県の屋台骨になってくれる若者をぜひ輩出していきたいと思っていますし、そのために日本一の技能を争う、技術を争うこの大会に近隣の小・中・高校生にはぜひ競技会を見てほしいとお願いしています。将来、技術でこの分野に行きたいという人が栃木県内にたくさんできれば、ものづくり県としてはこれからも栄えていく可能性は高いんじゃないかと思っています。この技能五輪・アビリンピックを一過性のものとししないで、そのレガシーを今後にどのように引き継ぐか考えていきたいと思っています。

いずれにしてもこの学力の問題はさらに向上を目指してもらいたいと思います。

続いては、教員の多忙の問題も気になるところですが、国が学校に対する支援制度を来年度から導入するという新聞報道がありました。こういったものも活用しながら、県独自として何が必要かも含めて考えてもらいながら、教員の負担軽減を図り一人ひとりと向き合う、子どもと向き合う時間を多くして、資質の向上、授業の質、それから教員の資質、両方を取組につなげていくことも重要だと思います。今回の結果に満足することなく、調査結果の分析を行った上で次年度以降につながるような効果的な施策を進めてほしいと思いますので、皆様方には引き続き協力をお願い申し上げます。

では、時間がちょっと予定よりも押してしまいましたが、これから体力について議論して参りたいと思っています。

グラフからわかりますように、男子は平成27年度よりは全国平均との差が大きくなっておりまして、体力の低下が懸念されます。女子については、平成27年度より向上し、全国平均と近い位置ですが、一方で全国平均が上昇しているために、ここ数年では初めて平均値を下回ったところです。教育大綱の目標で、「知・徳・体の調和のとれた発達を促すことによって生涯にわたって学び続ける力を育む」と定めましたが、体力もしっかり向上させていかなければなりません。今の児童生徒はスポーツに接する機会自体が少なくなっているような気がしますし、汗をかくのが嫌だという若い人が増えているということですからね。汗をかかないでどうするのかなと私は思いますけれども、スポーツに接する時間が少なくなっているという気がします。

子どもたちを取り巻く環境が多様化する中で、学校・家庭・地域などがどのようなか

かわりを持って体力向上を図っていくのか、またスポーツの楽しさを知って親しんでいくにはどういうアプローチが考えられるか、ぜひ委員の皆さんにご発言を願いたいと思います。

これは吉澤委員に1番目をお願いしまして、工藤委員、岡委員、伏木委員、教育長が最後という順番でお願いしたいと思います。

- 吉澤委員 子どもたちがかわいそうだと思うのは、昔だと広場があって、走り回ったりボールを投げたりということができたと思うんですけども、今は相当制限されている感じがします。ニュースで見たんですけども、小さな公園であっても遊具が必ずあったんですけど、それが次第に撤去されてきて、お年寄りが使う健康器具に置きかわっている公園が増えているという、そんな時代になってきていまして、子どもたちがその辺の広場で動き回るのはだんだん難しくなっているということだと思います。

したがって、学校での体育の授業、部活、そして地域のさまざまなスポーツクラブにおける活動になっていかざるを得ないものと思います。そういう意味で、学校は非常に重要ですけども、地域のさまざまなスポーツクラブで思い切ってやってもらうことがどうしても中心にならざるを得ないんじゃないか。それはさっき多忙化の話もありましたけれども、学校で、自分が経験したことがない部活動の顧問となっている今の部活の延長線上だけではちょっと足りないんじゃないか。ですから、外部の専門員の人に見てもらおうとか、あるいは地域のスポーツクラブで思い切って子どもたちがスポーツを楽しむということのほうが良いのではないかという感じがしています。

北関東3県で群馬、栃木は大体似たようなところのようですけれども、茨城がどうもスポーツ先進的な位置づけになっていて、常に10番以内に入っているようなこともありますので、茨城の知恵を少し学んで取り入れて、栃木の子どもの体力向上につなげていけたら良いんじゃないかと思います。以上です。

- 福田知事 ぜひその茨城と栃木の差は何かを吉澤委員には探究してもらいたいと思いますので、よろしく願います。では、工藤委員。
- 工藤委員 先ほどの学力とこの体力というのは、分かれているように捉えられがちなんですけれども、体を動かしていくということが特に小さいころは脳の発達を促すと言われていて、運動なんかしないで勉強しなさいというのは間違いだということが今言われています。そういった意味で、やはり体力の向上も大切だと言えます。

さらに、ある荒れていた学校が朝ランニングを始めたことによって、今までいじめが非常に起こっていた学校、暴力行為が多かった学校の生徒たちが落ち着きを取り戻したというデータもあります。やっぱり子どもたちが小さいうちは、体を動かすことで発散することも大切と感じますので、心身ともに健康であることが、学力や健全な精神を培っていくと言えますので、しっかりと取り組んでいく必要があると感じております。

ただ、先ほど吉澤委員がおっしゃったように、子どもたちが置かれている環境が犯罪のこともあり、なかなか思い切って遊べないと言われていまして、学校に朝少し早く来て、体を動かす時間を多めにとるとか、あとは小・中学校を見ていると非常にお昼の時間が短くて、ご飯を食べてばたばたして、ちょっと休み時間があってもすぐ次の授業へということが非常に多いので、しっかりと遊ぶ時間をつくっていくということ、例えば時間割の工夫をすることによってお昼休みをあと20分ぐらい長くするということで、

学校にいる間に遊びを思いっきりできる環境等を工夫することによってカバーしていけるのではと思っています。

先ほどの茨城県の話ですけれど、子どもたちがそれぞれ目標を持って、例えば逆上がりができるようになるとか、目標を立てて努力しているということも一つの要因ではないかという話がありましたので、学力だけではなくて、体づくりにおいても、自分なりの目標で楽しみながら体を動かすことにより体も成長させていくという意識づけが今後大切だと感じております。以上です。

○福田知事 ありがとうございます。では、岡委員。

○岡委員 栃木県には今市事件という悲しい事件がありまして、私はちょうどそのころPTA役員をしまして、あのころから子どもたちが見守られながら集団下校ということがずっと続いています。それはもちろん子どもたちの安全・安心を考えた上では重要なことであると十分認識しているんですが、子どもたちにしてみれば、ちょっとした寄り道もできなければ走ることもできない毎日なわけです。私の自宅の隣が公園なんです。分譲地の中に1つ公園をつくりなさいということで出来たんですが。その公園で、最近はず子どもたちの声がしない。誰も来ない。来たなと思ったら、ブランコに2人並んで座ってゲームをやっているわけです。家庭の中で体力を上げていくというのは難しいことなのかなと感じています。まして小学校、中学校の統廃合なんかで自転車通学がなくなって、みんなバスで送り迎えをして、昔の都会っ子はもやしっ子で田舎の子はたくましいなんて言われてましたが、今はそんなことはない。多分都会の子のほうが長い時間歩いているだろうと思うぐらいの状況にある。これは子どもたちにしてみればあまり良いことではないし、かわいそうなことだと思っています。

それと、地域のスポーツクラブチームです。クラブチームにしても、無料ではないわけで、家庭にしてみれば塾のお金を出して、ましてスポーツ、運動するためにまたクラブ代も出して、全ての家庭でそれを賄っていけるのかといたら、それは現実的ではなく、やはり学校で何とか子どもたちの体力を上げるための施策を考えなくてははいけないと思います。

授業ですけれども、自分たちとか自分の子どもたちがどうだったろうか。もちろんスポーツに親しむという中では球技とかどんなことでも良いんですけど、基礎的な運動が嫌だった思い出があるんです。バスケットボールをやる、サッカーをやる、野球をやる、ソフトボールをやるのは楽しい。でも、走ることには前向きになれなかった記憶があるんです。だから、それが苦にならないように、年間を通して必ず体育の授業の場合にはみんなで走る時間を設けるような授業のあり方も必要かと思っています。

もう一つ、これはなかなか難しいことで、保護者の理解とか地域の理解、もちろん学校、もしかしたら先生方の負担になるかもしれませんが、放課後の学校の開放です。校庭で、安全な場所で走り回って遊べとなると、やっぱり学校が一番安全だと思うんです。そうであれば、これは本当に全ての人のご理解を得た上で、週に1日でも学校の校庭を使って思う存分自由に遊ぶという日があってもいいのかなということを考えたりしています。

先ほどの学力とこの体力、そしてあと気力。気力を伸ばしてあげなくちゃダメです。やる気ですよ。勉強にしても運動にしても、やる気を持たせるための指導が必要になる

と思います。

それと、先ほどいろんな方の理解をと申し上げましたけれど、これも秋田県に視察に行つて学んだことですが、僕は前から県の教育委員会と市町の教育委員会ともっと連携を図るべきだとさんざん言っていて、秋田は県がこうすると言つたら市町がみんな同じ方向をぱつと向くと言うんです。県が旗を上げたら、市町がみんなそっちを向く。だから、底上げは結構やりやすい土壌なんですということを聞いてきました。みんなで県と一斉にこの日を設けましょうということができれば、体力的な底上げにつながっていくのかなということを考えております。以上です。

○福田知事 県の教育委員の皆さんと市町の教育委員の皆さんで意見交換会を一緒に1回やりましょう。25市町だから、100人くらいですか。

○宇田教育長 委員さん全員は出てきませんよね。各市町代表1人くらいですかね。

○岡委員 学校視察なんか行ったときに、市町の教育委員さんと意見交換会をします。

○福田知事 そこで意見交換をしているわけですね。

○岡委員 はい。だから今度11月に市町村の教育委員会連合会の研修会があるというので、そこにお邪魔をしようという話をしているところです。

○福田知事 どんどん仕掛けていったほうがいいと思いますよ。向こうから来るのはなかなか敷居が高いと思いますよ。こっちが行く分には大丈夫だと思いますけれども。県と市町の教育委員の皆さんとは相互に意見交換できるように環境づくりが必要だと思いますので、ぜひお願いします。では、伏木委員。

○伏木委員 幼いころに運動を楽しんで親しんだ子は生涯にわたって、中断したとしても大人になってもスポーツとか運動に親しむ傾向があると思います。なので、小さいころの思い出が勉強だけというのは余りにも味気ないので、友達と仲よくなるためには遊んだり運動したりというのは欠かせないと感じています。

運動が嫌いな子というのは常に競争して、どうせどんなに頑張ってもできないというような、体育の先生も運動ができる子にちょっと目を当てがちだと思うんですけれども、生涯にわたって健康でいられるような体づくりの一番最初は幼少期だという観点からも、運動を学校の中でどんどん取り入れていってほしいと思います。

それから、中学校に上がると部活動ということで、外部講師の方を呼びましようとか、いろんなことがありますけれども、例えば娘に聞いたことですが、中学校のときに学校でできたから頑張れたとか、学校の先生に教えていただいて、町のどこかとか運動公園でやっているテニスクラブ等まで行ったとか。それには親の協力も必要だったでしょうし、身近な形で運動ができたのは学校の先生が教えてくださった部活動という意味は大きかったと感じています。先生の多忙感を考えるとすごく難しいんですけれども、なるべく学校の中で活動できる余地を残していけたらと私自身は思っています。

それからまた、人間も動物ですから、体を動かさないと頭だけ使うなんていうことはあり得なくて、うつ病なども走るだけでも薬を使わずに改善したというアメリカの例もありますので、体を動かすことの大切さは意外と今ごろになって気づかれているような面があると思っていますので、ぜひ両方、ぜひたくですけれども、本県の体力も学力も両方運動して向上していくように、引き続き教育委員としても頑張りたいと感じております。

○福田知事 ありがとうございます。では、教育長。

○宇田教育長 それでは、陣内委員から3点、体力についていただいております。

まずは、全国とのスコア、点数の推移を踏まえてということで、以前から走る、跳ぶ、投げるが本県は劣るわけですがけれども、その理由としてスポーツ振興課でも神経系の機能が著しく発達する児童期に運動をしない子の割合が全国より高く、体の基本的な動きが身に付いていない児童生徒が多いためと考えられると分析をしているけれども、児童期に運動をしない子の割合が全国より高いのはなぜなのか、そこをしっかりと分析し、今後に活かしていくことがまずもって重要というご指摘をいただきました。

それから2点目、就学前から体を使った遊びの楽しさを知ることが重要というのは誰もがおっしゃっていることですがけれども、今の児童の保護者はインターネット、それからゲームの世代であるので、保護者自身が外遊びの経験が乏しいかもしれないということで、保護者へのアプローチも必要なんじゃないかというご指摘です。

それから、3点目はスポーツをする県民の増加を図るべきだというご意見で、栃木県の大きな特徴として、プロスポーツの盛んなことがある。プロスポーツチームと連携した県民総スポーツの大きな動きをつくっていけるチャンスだと。児童生徒のスポーツ意欲を高めるまたとない機会だと考える。

そこで提案ということで、知事、副知事、各部長、教育委員が手分けをして、幅広く県内のスポーツ観戦に出向き、選手たちと直接交流、応援、場合によっては参加する。栃木スポーツ応援チーム、「チームF」と言っていますけれど、Fは福田知事。チームFを結成してはどうでしょうということで、盛り上がるのではないかとご提言をいただきました。

私からですけれども、スポーツ振興課がつくっているチャレンジプログラムでは子どもの体力の現状ということで、小学校低学年はプレ・ゴールデンエイジと呼ばれ、神経系の発達が著しい時期で、この時期に多種多様な運動や遊びを経験させることによって運動習慣を形成させていくことが大切です。それから小学校高学年、9歳から12歳というのはゴールデンエイジと呼ばれ、神経系の発達がほぼ完成し、動作の習得に最も適した時期です。ここは、身長、体力、力強さが未発達なので、注意は要するけれども、そういう時期だというような分析の上に、いろんな学校、校庭での遊びが促される。

私自身のことを考えても、山の中で育ちましたので、小学校のころ何をやっていたかといったら、いつも山を駆け回っていたと思うんです。登るのも、低い山ですから、走って登ったし、走って下りてきたし、それで筋力もついたんだろうと思います。

外遊びをたくさん経験させるのは大事だということは皆さんわかっているんですが、なかなかそういう機会ができないのが現状だと思います。ただ、池田次長にうかがいますが、小学校は業間の時間が10時から30分ぐらいあるんですか。

○池田次長 30分ぐらいです。

○宇田教育長 30分ぐらい。そのときには子どもたちはみんな外に出て、場所取りをしながら一生懸命遊んでいるというんですね。それは、鹿沼のある小学校ですがけれども、宇都宮市はどうなんだろうなど。どこでもやっているとは思いますが。昼休みの時間を長くするというのは結構難しいので、本当に外遊びをする時間、今、岡委員にもご指摘いただきましたけれども、子どもたちは集団下校で、いっぱい勉強したら道草という環境が

つくればとは思っています。教育委員会の中ではなかなかできないところでもありますけれど、今後いろいろ考えながら、子どもたちの運動能力の向上につながるように、小学校の校長先生に何か提案ができればと考えているところです。以上です。

○福田知事 ありがとうございます。低学年がプレ・ゴールデンエイジ、高学年がゴールデンエイジ。いずれにしても小学校のときに運動しろということですね。その延長に中学校も当然あるので、運動した子どもは中学校でもやるでしょうし、高校でもやると。小学校でやるかやらないかがポイントだと感じました。我々のころはそんなの言われなくたって勝手に暴れてきたんですけれども、今はそうじゃない。ゲームとネット世代の親に育てられている時代です。やっぱり小学校が重要だと改めて思いましたので、ぜひ市町の教育委員、そして校長先生との意見交換を経て、どのように子どもたちを学校の安全な庭で遊ばせるか、あるいは汗を流させるか、そこにかかっていると思います。

地域で、団地の中で遊べといっても、なかなかこれは難しいでしょうし、安全なところでという学校だと思しますので、そこで汗を流すことは楽しいんだということがわかれば、その先の学童バレーとか野球とかサッカーをやらない子も、中学校ではテニスをやるかもしれないですね。あるいは、それ以外のスポーツにいそしむかもしれませんので、そういうきっかけづくりになるような教育施策を各市町も取り入れてくれるようにぜひ働きかけを我々もしますし、首長にはそういう話をしますけれども、委員の皆さんもよろしくお願ひしたいと思います。

私もアキレス腱を切って現役生活を終えるまでバスケットボールを30年近くやってきましたけれども、親からは、あんな腹っぺらしなんかやめて、うちの仕事を手伝えって、いつもそう言われていましたからね。何でこんな日曜、祭日、春休み、冬休み、夏休み、学校にばかり行っているんだっていつも怒られながら。でも、今日、元気に仕事ができるのは小・中・高校時代に基礎体力をつくったからだと思います。そういう点ではいくら能力があっても体力がついていかなければ発揮する場が狭まってしまうわけです。学力と体力は一对のものだと思いますので、両方求めて高まっていくような栃木にしていきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

作新学院が、昨年、夏の甲子園で優勝して、今年は春夏出場しました。残念ながら夏は1回戦で負けてしまいましたが、合宿を積極的に取り入れて、そこで先輩が後輩に勉強を教える、それを監督が義務づけると。成績が下がったら野球部は退部、そういう条件で、親の理解を得て、夜遅く練習することもあるし、朝早くから練習することもありますよ、そのかわり勉強もさせますよ、成績も上げますよ、強いチームに育てますよ、ということ約束して、親も全面的に先生に、監督に任せる。学校もそれを応援するというので、作新学院のナイン、選手は、兄弟以上に仲がいい。それがチームプレイに必ず出てくるということですね。兄弟以上に仲がいい。あいつはああいうふうにはボールを捕ったときには必ずこっちへ投げてくるとか、例えばそういったことが以心伝心でわかるということですね。それから学習能力も高まって、勉強もできるようになる。そういうことで日本一の座をつかんだ。作新学院は文武両道を実践していると改めて、何人かの人にお聞きして感じております。勉強のできる子は運動能力も高いと、運動能力の高い子は勉強もできるということだと思います。両方高めることを我々は目指していきたいと思ひますので、ご協力をよろしくお願ひいたします。

議論は尽きませんが、時間となりました。本日いただきましたご意見を踏まえまして、学力と体力の向上については今後も確認して参りますので、引き続きお力添えをお願いいたします。また、学力、体力以外にもさまざまな課題がありますが、それらの諸課題についても教育委員の皆さんと協力して参りたいと思います。

現在、地方創生の取組が全国的に進められておりますが、栃木県だけでなく、移住・定住等の施策はさまざまな自治体で行われております。教育で選ぶなら栃木県だと言ってもらえるように、皆さんと一緒に知恵を出して参りたいと思いますので、重ねてよろしくお願い申し上げます。以上で協議を終了します。

次回の会議ですが、冒頭申し上げましたように、雪崩事故の検証報告の結果を踏まえて、運動部活動における安全管理と今後のあり方をテーマとして、11月ごろ総合教育会議を開催したいと考えておりますので、具体的な日程等につきましては後日事務局から日程調整をさせてもらいたいと思いますので、その際はよろしくお願いいたします。

以上です。

4. 閉会

○司会 ありがとうございます。

以上をもちまして、平成29年度第1回栃木県総合教育会議を閉会いたします。

なお、お手元に昨年度開催いたしました総合教育会議でいただきました御意見とその対応状況についての資料を配付させていただいております。後ほどご覧いただければと思います。本日はありがとうございました。